

◆資料

高齢者の実態からみた地域コミュニティに開かれた保健室が果たす役割

The Role of health room for the elderly open to the local community

藤田 冬子¹⁾, 魚里 明子¹⁾

Fujita Fuyuko, Uozato Akiko

抄 録

本研究の目的は、先駆的な取り組みを行う専門職による健康相談や保健指導を行う窓口に来室する高齢者の健康ニーズ及び支援とその結果から、地域コミュニティに開かれた保健室が果たす役割を明らかにすることである。A県内で先駆的な取り組みを行う専門職による健康相談や保健指導を行う2か所の保健室において合計3回、地域住民を対象に講演会、健康相談、健康チェック、健康バランス食の試食、いきいき百歳体操等をおこない、その後、意識調査を行った。来室した高齢者は合計43名で、女性が多く、保健室で提供した内容はいずれの内容も高評価で再び来室を希望していた。保健室の果たす役割として、自覚症状がなくても健康チェックなどにより健康課題が見つかること、地域住民の健康維持・増進につながる情報を発掘し、その意味を住民が理解できるように伝えることがあった。これらにより住み慣れた地で長く暮らす生活を支えるといったことが明らかとなった。

キーワード：保健室、高齢者、地域コミュニティ、役割、看護

Key words : Local Health Room, Elderly, Local Community, Role, Nursing

I. はじめに

阪神淡路大震災の直後より、人々の暮らしを支えるためのコミュニティ支援活動として、「震災復興まちの保健室」が開かれた。当時、兵庫県内の8市20ヵ所の復興公営住宅で開催され、兵庫県看護協会などの協力で開始し、人々の暮らしが取り戻されるきっかけとなった。その後も現在に至るまで、身近な健康相談ができる場所「まちの保健室」として、少子高齢化に対応する地域の社会資本として、地域包括支援のシステムとしても機能してきた(学校法人行吉学園, 2020)。これらの動きは、兵庫県や鳥取県、東京都など全国のような看護系大学にも広がり、地域コミュニティで暮らす人々の健康を支える保健室として運営されるようになっていく。

また、その後も地域住民を対象とした保健室は、全国に広がり続け、自治体が運営する保健室としての開設や、都道府県看護協会主催の保健室の開設、そして、2011年には新たに新宿区で「暮らしの保健室」もスタートするようになった。「暮らしの保健室」では、団地内の一角に常設で夜間もひらかれており、地域のニーズに応じて、①暮らしや健康に関する相談窓口、②在宅医療や病

気予防について市民との学びの場、③受け入れられる安心な居場所、④世代を超えてつながる交流の場、⑤医療や介護、福祉の連携の場、⑥地域ボランティアの育成といった6つの機能を果たしている(秋山, 2019)。

このような地域コミュニティに開かれた保健室では、看護職をはじめとした主催者だけでなく、住民同士が共同体を紡ぐ場として機能していくことが重要であり(松本, 他, 2020)、また、地域住民にとっては、親近感もてる環境、地域でのつながり、仲間と楽しく健康づくり、介護予防につながる場ともなっている(稲田, 他, 2017)。

しかし、このような保健室で日々行われている健康相談や保健指導が、地域への健康増進や介護予防等にもたらす効果や、これらの保健室が果たしている役割については明らかにされていない。そこで、本研究では、地域で高齢者を対象にした専門職による健康相談・保健指導を行っている常設の保健室の活動や成果、利用する高齢者の実態から、保健室が地域住民に対して果たしている役割を明らかにすることとした。

II. 目的

先駆的な取り組みを行う専門職による健康相談や保健指導を行う窓口に来室する高齢者の健康ニーズ及び必要

¹⁾ 神戸女子大学看護学部
Kobe Women's University, Faculty of Nursing

な支援とその結果から、高齢者を対象にした地域コミュニティに開かれた保健室（以下、保健室とする）が果たす役割を明らかにする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究対象者

保健室に来室する、その地域コミュニティに居住する高齢者約 40 名

2. データ収集期間

令和 2 年 2 月～3 月の 3 日間

3. データ収集方法

A 県内で先駆的な取り組みを行う保健室において、地域住民を対象にした講演会、健康体操、健康バランス食の試食、希望者に対する健康相談、健康チェック（血圧測定、脈拍測定、体組成測定、フレイルチェック、唾液アミラーゼによるストレスチェック）等を実施した。1 回の保健室の開催時間は 2～5 時間とし、保健室の開催内容により決定した。これらの取り組みの中で高齢者から得られた会話や数値データを収集した。

対象者には保健室利用後に無記名の意識調査を行った。アンケートによる意識調査は 11 項目で、4 項目がデモグラフィックデータ、7 項目が保健室開催の内容に関するもので、保健室が開かれていることを知っていたか、保健室利用の感想、再度利用したいと思ったか、保健室でよかったものはどれか、「健康相談」や「健康チェック」を利用してどうだったか、「講演」はどうだったか等とした。デモグラフィックデータ以外の意識調査の 7 項目及び回答方法は表 1 のとおりである。

表 1 意識調査の概要

調査内容	回答方法等
保健室が開かれていることを知っていたか	「はい・いいえ」の 2 択で回答
保健室利用の感想	自由記載
保健室を再度利用したいと思ったか	「はい・いいえ」の 2 択で回答
保健室でよかったものはどれか	「健康相談」「健康チェック」「講演」から選択し回答
「健康相談」はどうだったか	「大変良かった～物足りなかった」の 4 段階から選択し回答
「健康チェック」はどうだったか	
「講演」はどうだったか	

4. データ分析方法

講演会、健康相談、健康チェック、健康体操、健康バランス食の試食等に参加した高齢者の反応・参加中と参加後の質的データの内容分析、意識調査結果を単純集計した結果から保健室へのニーズ、健康チェックの数値データから高齢者の健康課題と必要な支援を抽出した。

5. 倫理的配慮

研究対象者への研究依頼は、保健室の定期の開催時に参加募集を文書または口頭で調査の目的及び内容の説明を行い、プライバシーの保護を行うとともに、さらに保健室入室時に口頭で研究協力は自由意思によるものであり、協力をしなくても不利益を生じないこと、また、無記名の意識調査のアンケート調査は回答により研究への同意を得られたものとするを明記し、回答は 5 分程度であることを口頭で説明した。さらに、アンケート結果は個人情報では研究者のみが閲覧できるように鍵のかかる場所で施錠管理した。なお、本研究は神戸女子大学人間を対象とする研究倫理委員会による承認（承認番号 2019-34-1）を受けて実施した。

Ⅳ. 結果

1. フィールドとした保健室の概要及び開催内容

データ収集は A 県の 2 つの市で複数年にわたり開催している保健室で、合計 3 回行った。B 保健室および C 保健室を利用した地域住民は、男性 3 名、女性 40 名で合計 43 名だった。全員、独歩で自らの意思により来室していた。フィールドとした保健室の概要と開催概要は以下のとおりである。

1) B 保健室

B 保健室は、D 市の人工島にある。島内の病院・介護老人保健施設・特別養護老人ホーム・地域包括支援センター・クリニック等で働く看護職により運営されており、2018 年 1 月に開設された。常設で月 1 回 2 時間、定期的に開催されている。1 回の開催で来室する高齢者は 2～3 組程度で、過去、2 年間の来室者は 110 名（延べ数）である。相談者は高齢者やその家族が中心で女性が多く、高齢者を心配した家族が高齢者を伴って相談に来るケースも多い。通常の保健室開催では、健康相談を中心に行っている。

データ収集をした保健室の開催は 2 時間の 1 回であり、健康チェック、健康相談、講演会を行った。健康チェックの内容は骨密度測定、唾液アミラーゼ測定によるスト

レスチェック、脈拍測定、血圧測定、体組成測定との5つだった。また「食習慣とフレイル」をテーマに30分間の講演を行った(表2)。

表2 B保健室開催内容

第1回	2020年2月 10:00～12:00 場所：B保健室がある体育館とB保健室
参加人数：20名(男性1名、女性19名)	
10:00～12:00	健康チェック・健康相談 骨密度測定、ストレスチェック(唾液アマミラーゼ測定) 脈拍測定、血圧測定、体組成測定、フレイルチェック
11:00～11:30	講演テーマ： 「食習慣とフレイル ～しっかり食べて元気に暮らそう～」 講師：管理栄養士

2) C保健室

C保健室は2003年、E市に地域活動の拠点として発足し、看護職とボランティアにより運営されている。常設で開催は週に3日、定期的で開催されている。健康セミナー、フットケアサロン、健康相談等が実施されてきており、2005年からは生活習慣病予防・介護予防を目的としたNPO法人となり、500キロカロリーの健康バランス食を提供するヘルスケアレストランも運営している。来室者は地域コミュニティで暮らす高齢者であり、1か月あたり約40人(延べ数)である。

データ収集をおこなった保健室の開催は合計2回で、1回目が2時間、2回目が4時間半だった。1回目は健康チェック、健康相談、講演会を行った。2回目は健康チェック、健康相談、ミニ講義、健康バランス食の試食、いきいき百歳体操を行った。健康チェックの内容は、血圧測定、脈拍測定、握力測定、体組成測定、足指筋力・足指力測定との5つだった。講演会は60分間でテーマは「住み慣れた場所で安心して暮らしたい!」「フレイルとフットケア」だった(表3)。

表3 C保健室開催内容

第1回	2020年2月 13:00～15:00 場所：福祉会館	第2回	2020年3月 10:30～15:00 場所：C保健室
参加人数：12名(男性1名、女性11名)		参加人数：11名(男性1名、女性10名)	
13:00～13:45	健康チェック・健康相談 血圧測定、脈拍測定、握力測定、体組成測定、足指筋力測定、足指力チェッカー測定	10:30～11:30	ミニ講義： 「フレイル予防とフットケア」 講師：大学の看護教員
14:00～15:00	講演テーマ： 「住み慣れた場所で安心して暮らしたい! おしゃべりが一番のお薬! 元気づくり大作戦」 講師：暮らしの保健室で働く保健師	11:30～13:00	健康バランス食の試食
		13:00～14:00	健康チェック・健康相談 血圧測定、脈拍測定、握力測定、体組成測定、足指筋力測定、足指力チェッカー測定
		14:00～15:00	いきいき百歳体操の実施

2. 保健室開催結果

保健室開催の詳細について、保健室ごとに報告する。また、アンケート結果は対象者が少ないため実数とした。

1) B保健室の開催結果

(1) 参加者の概要及び開催場所

来室者は20名で男性1名、女性19名だった。90歳の女性が1名で、以外は、70～80歳代だった。開催は、いつもの保健室の場所で、講演会や健康測定のため、相談用の小部屋と40名程度入れる研修室の2室で行った。当日は保健室開催の隣の部屋で本保健室とは別の健康チェックイベントが行われており、参加者の中にはこのイベントの後に来室し、その日に受けていない健康チェックや講演をきいていた。また、B保健室ではフレイルチェックを行う体制を整えていたが、1週間前に近隣で、フレイルチェックがあり、1名も受けられることはなかった。また意識調査アンケートには10名が回答した。

(2) 健康チェックと健康相談

健康チェックを行った高齢者は、骨密度測定19名、唾液アマミラーゼによるストレスチェック15名、体組成測定6名、血圧測定6名、脈拍測定11名、フレイルチェック0名だった(表4)。健康チェックのなかで、保健室に普段設置していない骨密度測定が20名中19名、唾液アマミラーゼによるストレスチェックが20名中15名と、ほとんどの高齢者が測定を希望した。また、看護師による脈拍測定11名の中で、来室者の2名に不整脈があり、うち1名は未治療で今回の指摘が初めてだった。この未治療の高齢者1名については、健康相談につなげ、不整脈の意味と脳梗塞や心不全などのリスクが高くなることを説明し、医療機関の受診を勧めた。

また、唾液アマミラーゼによるストレスチェックを受ける中で、唾液分泌が少なく測定困難な高齢者が1名いた。この高齢者は、唾液分泌機能の低下が考えられたため、

健康相談につなげ、生活上の困りごとを聞くとともに唾液分泌のマッサージを指導し、耳鼻咽喉科の受診を勧めた。体組成測定を受けた6名の結果は、BMI 値18.5以下が3名、筋肉量評価で「低い」の判定が6名全員、栄養評価ではたんぱく質不足が6名全員だった(表5)。健康チェックに対するアンケート結果では、脈拍測定を日常的に行わないため知ることができてよかったことや、ストレスチェックが参考になったという回答を得た。

表4 B保健室での健康チェックの内容と人数

骨密度測定	唾液アミラーゼによるストレスチェック	In Body (体組成計)	血圧測定	脈拍測定	フレイルチェック
19名	15名	6名	6名	11名	0名

表5 B保健室での体組成測定の結果

		60歳代後半女性	60歳代後半女性	70歳代前半女性	70歳代後半女性	70歳代後半女性	90歳代前半女性
In Body 点数 (満点100点)		74	64	70	75	71	69
B	M I	20.3	15.3	20.6	19.3	17.6	16.3
筋肉量評価		低	低	低	低	低	低
栄養評価	たんぱく質量	不足	不足	不足	不足	不足	不足
	ミネラル量	不足	不足	不足	不足	不足	良好
体脂肪量		良好	不足	良好	良好	良好	不足

(3) 講演会

保健室を学びの場としても提供するため、講演会を開催した。対象は地域で暮らす高齢者とした。テーマは「食習慣とフレイル—しっかり食べて元気に暮らそう—」とし、時間は30分間で、講師は管理栄養士が行った。フレイル予防と日ごろの食生活の重要性について知ってもらうことを講演のねらいとした。具体的な内容として、フレイルの基礎知識、フレイル予防の食習慣の見直し、サルコペニア予防と食品摂取の多様性、食事摂取量の基準、10品目の食事摂取の目安と「さあにぎやかにいた

ただく」という言葉(さかな、あぶら、にく、ぎゅうにゅう、かいそう、いも、たまご、だいち、くだもの)で、バランスよく必要な食品摂取をおこなう方法と必要性を紹介した。講演を聞いた人には、講師のパワーポイント原稿をすべて印刷し配布した。講演を聞いたのは高齢者9名であり、熱心に聞き入りうなずいたりメモを取ったりしていた。また、講演後は「この話を聞いただけでも十分です!」と喜んでた。

2) C保健室の開催結果

(1) 参加者の概要及び開催場所

第1回の参加者は12名で男性1名、女性11名だった。

第2回の参加者は11名で男性1名、女性10名だった。第1回は講演会のため体育館とし、第2回はミニ講義のため通常開催しているいつもの保健室の場所で行った。C保健室では無記名の意識調査アンケートに15名(第1回7名、第2回8名)が回答した。

(2) 健康チェックと健康相談

健康チェックと健康相談を受けたのは、第1回目の参加者12名中2名が、第2回目は8名だった。健康チェックを受けた全員より「大変良かった」「良かった」というアンケート結果を得た。良かったものとしては、握力、体組成検査、足指筋力測定、足指力チェッカーがあり、理由は「今までできなかったこと」という回答だった(図1、図2)。



図1 健康チェックの準備



図2 健康チェック風景

(3) 講演会およびミニ講義

第1回に講演会として、他府県で暮らしの保健室を開催している保健師を講師として、「住み慣れた場所で安心して暮らしたい!おしゃべりが一番のお薬!元気づ

くり大作戦」というテーマで行った。講演会の対象は地域の高齢者だけでなく、地域で働く人々とした(図3)。講演のねらいは「暮らしの保健室」とはどういったものなのかということを知りたいと地域の人々、特に地域で看護職として仕事をしている方や地域活動をしている方たちに知ってもらおうこととした。講演を聞いてアンケートを提出した7名中4名が暮らしの保健室のことを「初めて知った」という回答であった。講演は、全員が「大変良かった」「良かった」という回答であった。講演の感想としては、「地域の人が気軽に集まれる場があればよいと思いますが、いざ誰が始めるのか?で困ります」「看護職が進めていくイメージを見せていただきました」「実際には、財源、人材、課題が大きい」「経理の確保が実際は難しいと思う」「保健師の熱意やハートが根本にあるのがよくわかった」等があった。

第2回にミニ講義を、保健室の代表である保健師と大学教員を講師として、「フレイル予防とフットケア」というテーマで実施した。対象は地域で暮らす高齢者であり、講演のねらいは、フレイルとは何か、足の状態をよくすることがフレイル予防につながることや足のお手入れ方法について知ってもらおうこととした。また、フレイルチェックの一つであるイレブンチェックを一緒におこない、より具体的にフレイルについて学ぶことができた(図4)。アンケート結果によると「ミニ講義」については、全員が「大変良かった」「良かった」という回答であり、「フレイルの意味を知りませんでした。ありがとうございます。」といった感想を得た。



図3 講演会



図4 ミニ講義

(4) 健康バランス食の試食といきいき百歳体操

2回目は、フレイル予防のために重要な栄養と運動ということで、通常の保健室のレストランで提供している「健康バランス食」を試食してもらった(図5)。アンケート結果によると「健康バランス食」については、ほとんど全員が「大変良かった」という回答であり、「健康バランス食はどれも塩分控えめでおいしかったです」という感想があった。また、理学療法士の指導のもと「いきいき百歳体操」を実施した(図6)。アンケート結果では、参加者全員が他の場所で「いきいき百歳体操」を既に経験したことがあるということだったが、「プログラムでは百歳体操がよかった」という人が10名と多かった。さらに、「ここで百歳体操を実施したら参加するかどうか」の希望を募ると全員が「参加したい」という反応だった。



図5 健康バランス食



図6 いきいき百歳体操の実施風景

VI. 考察

今回、2か所で行った保健室は従来から地域コミュニティの中で開催されており、地域住民にとって既知の存在で、高齢者も健康への関心を持って来室していた。そこで、今回2か所で開催した3回の保健室の開催結果から、地域で自立して暮らす高齢者の健康課題と予防、ヘルスリテラシーを獲得できる資源として保健室が果たす役割について考察する。

1) 地域で自立して暮らす高齢者の健康課題と予防

2つの保健室には合計43名の高齢者が来室していた。保健室はいずれも常設で定期的で開催されており、徒歩圏内で来室できる地域コミュニティでの開催であることから、高齢者にとって通いやすい場所であるとともに、同世代の人々との交流の場となっている。コミュニティの特性に応じた連携・協働体制の構築(藤井, 他, 2017)も保健室機能の一つであることが指摘されており、今回の取り組みにおいても、自らの健康課題に対しても向き合う機会として保健室での健康チェックが機能していた。来室者は、血圧測定など家庭に常備してある機器の測定はもちろんのこと、体組成測定や足指チェッカー、骨密度測定など、ひとりでは測定が難しいものも活用していた。来室者の評価として、「いつもしたことがなかったから」「フレイルの意味を知らなかった」という回答が複数あることから、高齢者の日常にプラスした健康状態の把握、フレイルへの関心と予防対策への知識を高めることができていた。保健室の機能として、定期的で継続した保健室の開催が、地域住民の健康意識を向上させ、自らの健康行動を起こすきっかけとなることも報告されており(田中, 他, 2020)、今回の取り組みでも不整脈の発見など、新たな病気の発生につながる病態が明らか

となる場面があった。この時の対応として、不整脈の意味を伝え今後の受診行動をすすめるなど、保健室が疾病予防の機能を果たしていたことも同様の一例といえる。

また、2つの保健室では共通して、フレイルや栄養について取り上げられていた。その中で明らかになった健康課題として、自立している高齢者においても筋肉量の低下やたんぱく質の低下が明らかとなっていた。フレイルの危険因子の一つとして、偏った食事や運動不足などの生活習慣がある。フレイルの進行にはエネルギー摂取量と栄養素の質の両方が重要であることや、健康的な食事パターンがフレイルの危険性を低下させることが指摘されている(荒井, 2018)。今回の取り組みでは、フレイルの危険性を低下させるため、講演ミニ講義、「健康バランス食」の試食により、バランスよく必要な食品摂取をおこなう方法と必要性について、学ぶ機会を提供していた。地域で自立して暮らす高齢者においても、筋肉量の低下やたんぱく質の低下は、フレイルやサルコペニアに陥る危険を併せ持つことを意味する。従って、このような保健室で、講師と来室者が少人数で対面し参加型で学ぶ機会は、フレイル予防の実践的な取り組みとなっているといえる。

さらに、B保健室で自ら来室している高齢者が体組成測定を希望し行ったにもかかわらず、測定者6名全員の筋肉量が「低」だったり、C保健室で後期高齢者の来室が多い中で健康チェックを積極的に希望し受けていたのは、老化による体への影響に関心を持ち続ける姿勢であるとも考えられた。このような高齢者自身の健康意識や体への関心を高め、予防に繋がれるような健康チェック等を行う保健室の開催は、高齢者の健康寿命の延伸にも貢献するものであり、元気なうちから予防を推進する保健室が担う役割の一つであるといえる。

以上のことから、地域で自立して暮らす高齢者の健康課題は、自覚症状がなくても健康チェックなどにより明らかになるものがあり、新たな病気の予防に向けた行動につながる手がかりなど、保健室の利用により可能になることが示唆された。また、保健室の定期的な開催は、高齢者の現状維持の指標獲得、予防や早期発見に貢献すると考えられる。

2) ヘルスリテラシーの向上にむけて保健室が果たす役割

2つの保健室で行う健康チェックには、来室者が自ら日常的に測定可能な血圧測定、脈拍測定とともに、非日常である特殊な機器である体組成測定や足指チェッ

カー、唾液アミラーゼによるストレスチェック、握力測定などがあつた。日常的に実施できる健康チェックを保健室で行うことは、いつもの自己測定値と比較する機会となるとともに、測定の正確さを知る機会になることが考えられる。また、非日常的な機器の測定は、可視化しにくい身体の状態を知る機会となっている。

日常も非日常もともに、その人自身のその時の状態を示すヘルスリテラシーの手がかりとなる。それらが異常値であったときに、健康相談は、看護職がその地域での生活状況と医学的知識をもとにその場でアドバイスを行っている。このような健康チェックとともにその意味を健康相談につなげられることは、保健室の強みでもある。また、高齢者の心配を増大させずに、「たいしたことではない」と軽く考えず、自らの健康課題に向き合うことを支援することができる。例えば、唾液アミラーゼでストレスチェックに来た高齢者の唾液分泌が少ないことをオーラルフレイルの予防につなげていたことなどが該当する。これらはヘルスリテラシーの活用資源として保健室が果たす役割の一つでもあり、測定だけで終わらせずに、的確な看護職のアドバイスが強みとして生かされていた。

このような地域コミュニティでの保健室の活動については、生活範囲である小地域のつながりを基盤に身体的・精神的・社会的健康づくりを支援する役割（聲高，合田，2021）としても捉えられており、今回の取り組みでも同様の結果を得た。つまり、保健室で行う健康チェックおよび健康相談は、地域住民にとって潜在化したヘルスリテラシーを発掘し予防や健康増進の貴重な資源となっていることが推察される。日本学術会議は2020年に「地元創成看護学」の創設が提言された。「地元創成看護学」では、「地元（home community）の人々（population）の健康と生活に寄与することを目的とし、社会との協働により、地域の自律的で持続的な創成に寄与するとされている。この地元創成看護学の実践のなかで、これからの看護職は今までよりさらに地域コミュニティへの視野を広げ、実践・研究を進めていくことが求められる。つまり、本研究で取り組んだ保健師活動の役割を担い続けることは、地元創生看護学としても示された地域で暮らす高齢者の人々が健康に暮らす資源として、保健室が地域に根付き、共にあり続けることのニーズとその重要性を示唆しているといえる。

以上のことから、ヘルスリテラシーを活用する資源として保健室が果たす役割として、地域住民が持つ健康の

維持増進や予防にかかわる情報を発掘し、その意味を住民が理解できるように伝えることや、それによって住み慣れた地で長く暮らす生活を支えるといったことがある。

VII. 研究の限界

今回は複数年常設で定期的に行っている2か所の保健室で収集したデータであり、一部の地域であること、意識調査のアンケート回収数も少なく、一般化するには限界がある。今後は、開催場所及び開催回数を増やすことにより、保健室利用者のデータも蓄積され、さらに地域に開かれた保健室に求められる役割が明らかになると考えられる。

VIII. まとめ

先駆的な取り組みを行う専門職による健康相談や保健指導を行う2か所の保健室において合計3回、地域住民を対象にした講演会、いきいき百歳体操、健康バランス食の試食、希望者に対する健康相談、健康チェック等を行った。来室した高齢者は合計43名で、女性が多かった。来室者への意識調査では保健室で提供した内容はいずれも高評価であり、再び来室を希望していた。

地域で自立して暮らす高齢者の健康課題は、自覚症状がなくても健康チェックなどにより明らかになるものがあり、新たな病気の予防に向けた行動につながる手がかりなども、保健室の利用により可能になることが示唆された。また、ヘルスリテラシーを育成する資源として保健室が果たす役割として、地域住民が持つ健康の維持増進や予防にかかわる情報を発掘し、その意味を住民が理解できるように伝えることや、それによって住み慣れた地で長く暮らす生活を支えるといったことが明らかとなった。

謝辞

本研究にご協力くださいました皆様に心より感謝申し上げます。

助成

本研究は令和元年度保健事業推進費等補助金 老人保健健康増進等事業「専門職による健康相談・保健指導の提供を行う地域に根付いた窓口に関する調査研究事業」の一部として実施した。

利益相反

本研究に関する利益相反はない。

文献

秋山正子 (2019) .「暮らしの保健室」は未来型共生社会への入口,
コミュニティケア, 21(7), 14-21.

荒井秀典 編集 (2018). フレイル診療ガイド 2018 (初版), 82-
99. 一般社団法人日本老年医学会, 国立研究開発法人国立長寿
医療研究センター, 東京.

藤井麻帆, 田中響, 美船智代, 近田敬子 (2017). 「まちの保健室」
の活動地域拡大に向けての方略 ~コミュニティ特性に応じた
連携・協働~, 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要, 75,
35-43.

学校法人行吉学園 (2020). 専門職による健康相談・保健指導の
提供を行う地域に根付いた窓口に関する調査研究事業報告書,
86-91.

稲田千明, 荒川 満枝, 高田 美子, 田中 響, 近田 敬子 (2017) .「出
前・イベント型まちの保健室」に参加した住民の健康意識に
関する調査, 厚生学の指標, 64(15), 19-26.

聲高英代, 合田佳代子 (2021). 高齢者が見出す「地域の保健室」
の価値, 甲南女子大学研究紀要Ⅱ, 15, 11-18.

松本 弘美, 藤井 麻帆, 福永 まゆみ (2020). 高齢者の社会参加
の要因となる交流に関する文献レビュー, 鳥取看護大学・鳥
取短期大学研究紀要, 81, 21-29.

日本学術会議, 提言「地元創成」の実現に向けた看護学と社会
との協働の推進: のポイント,
<https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/kohyo-24-t292-8-abstract.html>
2021年12月28日閲覧

田中美菜江, 稲田 千明, 田中 響 (2020), T 自治公民館における「ま
ちの保健室」実践報告, 鳥取看護大学・鳥取短期大学研究紀要,
80, 45-50.

名張市まちの保健室一覧.

<https://www.city.nabari.lg.jp/s031/090/020/201502052259.html>
2021年10月10日閲覧